

Title	<特別エッセイ> お礼の言葉
Author(s)	玉井, 暲
Citation	Osaka Literary Review. 48 P.283-P.284
Issue Date	2010-03-24
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25346
DOI	10.18910/25346
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

お礼の言葉

玉 井 暲

今回の *OLR* 48 号は、私の退職記念号ということで編集委員の方々をはじめ、元 *OLR* 同人と現在の *OLR* 同人の方々、さらには英米文学・英語学研究室の方々にご高配をいただいて出来上がったものである。特に貴重な時間を割いて私にまつわるエッセイをご寄稿いただいた方々に心よりお礼を申し上げたい。

OLR は、1962 年の創刊ののち、順調に号を重ね今年で 48 号を刊行するに至った。*OLR* は、数年前より「同人誌」的な雰囲気の良い良さを残しつつ、学術誌としての性格を明示するために、ISSN 番号を取得し、また編集委員会編集によるレフリー制を導入し、より一層の充実を図ってきた。お蔭さまで、学界の各方面からの反応は一定して高い評価を受けており、このことは、英文科研究室に所属して同誌の編集に何らかのかたちで関わってきた者にとってはまことに喜ばしいことである。

OLR には私もお世話になった。若い頃にオスカー・ワイルド論とアーサー・シモンズ論を載せていただいた。この *OLR* が、私の退職を記念して特別号を刊行して下さるという。この上ない喜びである。

私は、1971 年より助手として 3 年余り、1983 年よりは助教授・教授として 27 年、阪大の英米文学・英語学研究室のお世話になり、2010 年の 3 月末日をもって、63 歳にて定年退職の日を迎える。この間、私の周囲にはたえず *OLR* があったわけで、*OLR* とともに歩んできたという想いが強い。ただ反省すべきは、文学部に助教授として着任以降は種々の忙しさにかまけて寄稿できなかったという憾みである。退職後は、ひきつづき *OLR* 同人に残してもらうつもりだが、寄稿のための時間的余裕は少しは取れるようになるだろうか。楽しみにしているところである。

今回の OLR は、私との思い出に関わるものというテーマを中心にして、阪大英文科に関わる恩師・先輩の方々から、友人・同輩の方々、そしてかつての学生および現在の学生諸君らに及ぶさまざまな層からのエッセイを収録するという企画のもとで編集されたものである。じつは、私はこれらのエッセイをまだ読ませていただけてはいない。刊行後の楽しみにして下さいという編集部の暖かいご配慮によるものであろう。どんな内容だろうかとあれこれ想像するのだが、漏れ聞くところから判断すると、厳しい励ましの言葉とともに、過大な言葉、教師冥利に尽きるありがたい言葉が多数詰まっていそうである。私が阪大で過ごした学生時代からの生涯がこれらのエッセイのなかに凝縮されているにちがいない。退職後の日々への最高のプレゼントである。多分、涙なくしては拝読できないであろう。

(2010年2月28日)